

令和4・5年度 長崎県教育委員会研究指定
長崎県「学びの活性化」プロジェクト 実践モデル校事業
令和4・5年度 佐世保市教育委員会研究指定 「授業改善」

研究紀要

【研究主題】

読解力を高め、主体的に学びに向かう生徒の育成
～『長崎県授業改善メソッド』とICTの活用を通して～



令和5年11月24日(金)

佐世保市立宮中学校

目次

はじめに

I 研究概要	1
1 研究構想図	1
2 研究構想関連図	2
3 研究組織	2
II 研究の実際	3
1 授業改善研究部	
(1) 研究活動の目的	3
(2) 研究活動の概要	3~ 4
(3) 研究活動の具体	4~10
2 家庭学習研究部	
(1) 研究活動の目的	11
(2) 研究活動の概要	11~12
(3) 研究活動の具体	12~16
III 成果と課題	17
1 成果	
(1) 各種検定・テストなど数値的に確認できる成果	17
(2) 生徒の自治的活動の充実	18
(3) ICTの活用（質問紙調査から）	18
2 課題	
(1) 家庭学習時間について	18~19
(2) 主体的に学びに向かう力の向上	19
(3) 教科横断的な深い学びへの取組	19

おわりに

はじめに

本校は生徒数50名あまり、職員は10名ほどの小規模校で、何をするにも圧倒的に「マンパワー」が足りない状況にあります。しかし、その穴を埋めるべく保護者や地域の方々に多大なご協力をいただきながら学校を運営しています。先日も体育大会を実施したばかりですが、生徒と同様かそれ以上に保護者や地域の方々に大会を盛り上げていただきました。取材に来ていたマスコミ関係者が「どんな行事もこんな感じになるのですか？」と驚かされていたほどです。このように、関係する皆様方の力に支えられて本校はここまで歩んできました。

学校にご協力をいただいている保護者、地域の期待に応えるにはどうすればよいかを考えたとき、「学びの充実」というキーワードにたどり着きました。そのような折、令和4年度、長崎県教育委員会および佐世保市教育委員会より2年間の研究指定のお話をいただきました。そこで本校は、「読解力を高め、主体的に学びに向かう生徒の育成」を研究主題に掲げ、遅々とした歩みながらも現在まで研究を続けてまいりました。

「学びの充実」を具現化するにはという大命題を抱え、当初職員はとまどうばかりでしたが、研究主任を中心とした職員集団がとにかく前へ前へと進んでいったこと、また、要所において県および市の教育委員会の先生方からご指導をいただいたことで、少しずつ成果が見え始めました。研究2年目となったとき、「研究の道筋がはっきりと見えてきて、やっけていてとても充実感があります。」という職員の発言を聞いたとき、研究活動がもたらす成果は生徒の変容だけではないことをはっきりと認識することができました。学校を、生徒を、そして職員を預かるものとしてこれ以上の喜びはありません。

研究活動の具現化の一つとして、「家庭学習の充実」に目を向けたとき、「それは家庭のことだから親に任せましょう」といった“丸投げ”はやめようと職員で申し合わせました。生徒の力を伸ばすことは、私たちの“恩返し”なのだ。「どうしたら家庭学習を充実させることができるのか」「それを学力向上につなげていくには」ということを全職員で一生懸命考え、実践してきました。

その実践の一端を本日は発表できることとなりました。とはいえ、約1年半の研究活動でも十分納得のいく場所への到達までは至っておりません。したがって、多々不足部分が見受けられることと思います。研究協議会等でご意見をいただければ幸いです。

最後に、つたない研究ながら、本日の発表まで、本当に熱意を持って指導していただいた、長崎県教育委員会および佐世保市教育委員会の先生方に感謝申し上げますと共に、今後とも引き続きご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

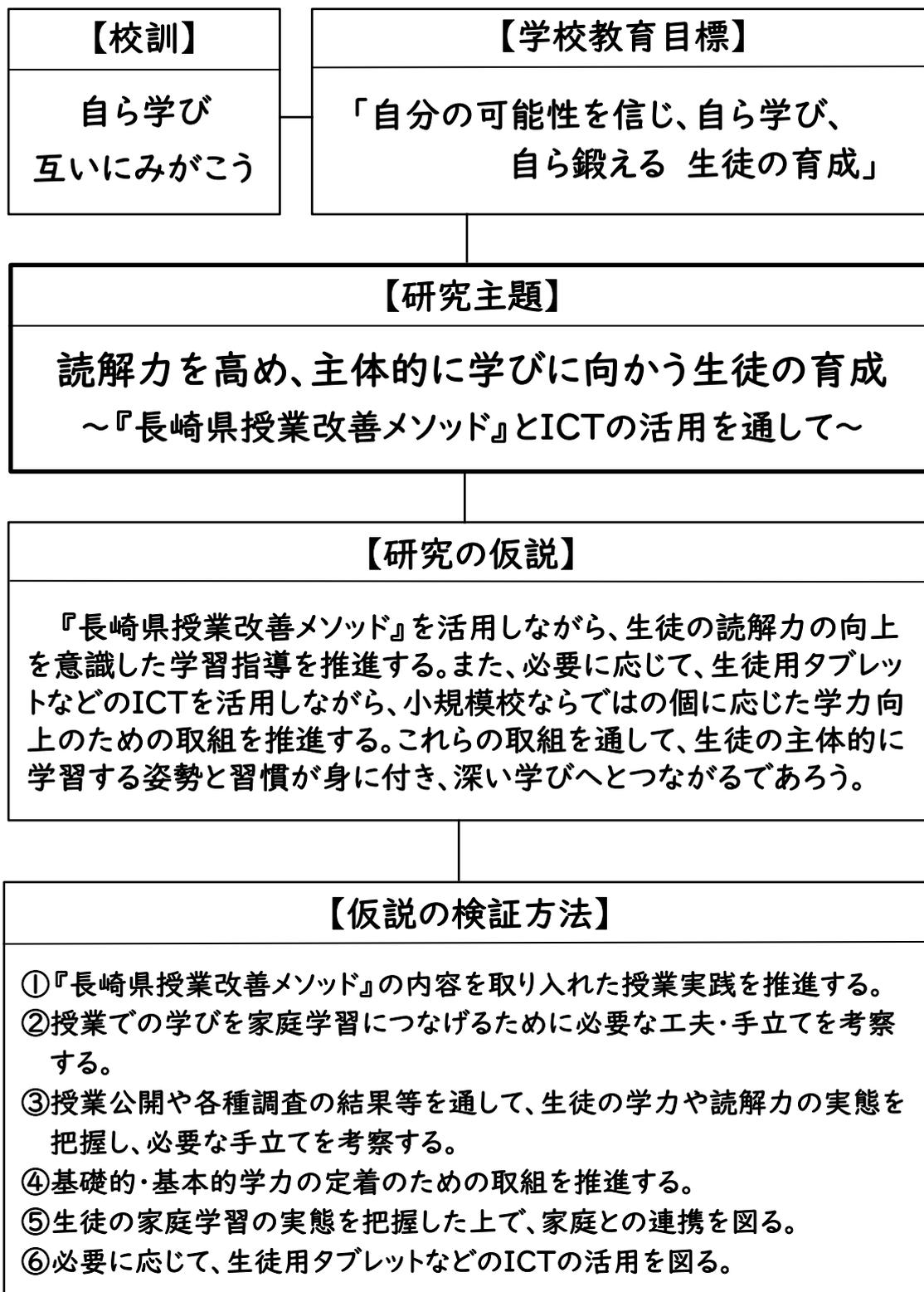
令和5年11月24日

佐世保市立宮中学校

校長 熊本 直樹

I 研究概要

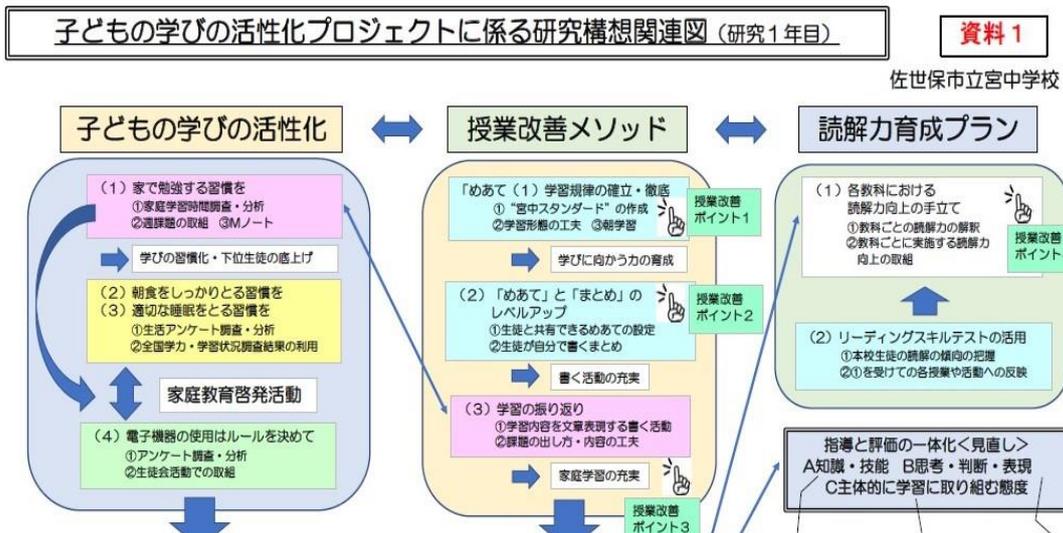
I 研究構想図



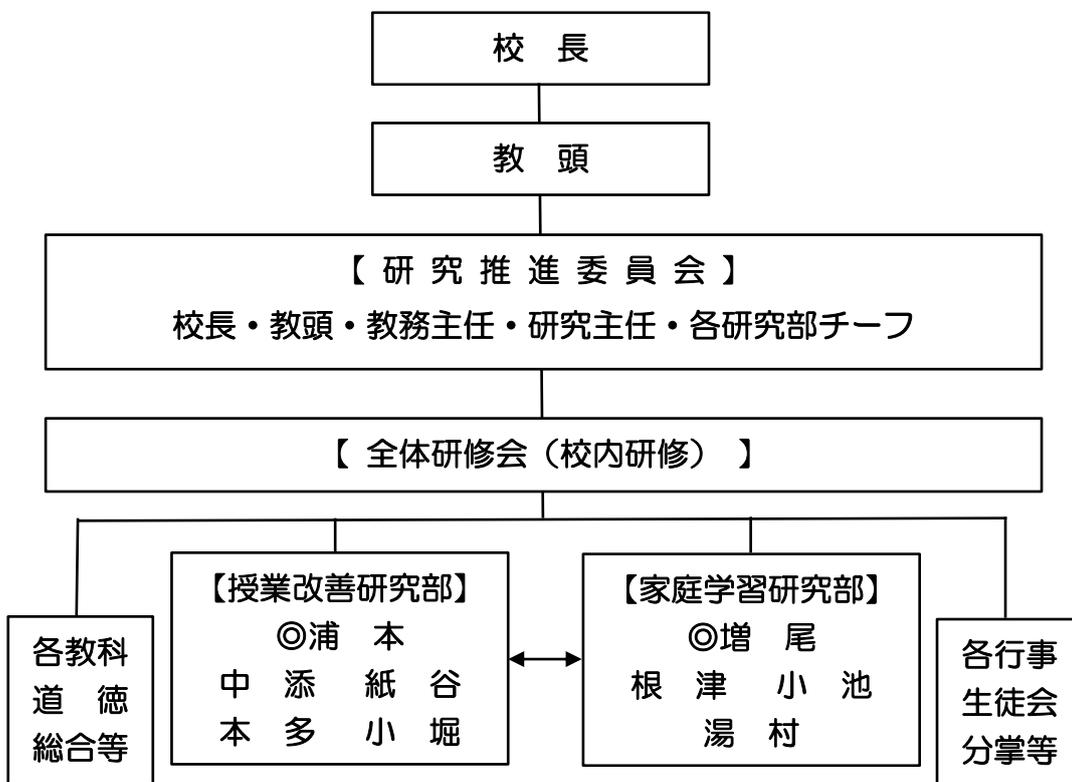
2 研究構想関連図 別資料1及び2

研究活動を速やかにスタートさせるため、構想関連図を作成し、全職員でその方向性について確認した。(詳細は資料1及び2を参照)

(研究構想関連図1年目(一部抜粋))



3 研究組織



Ⅱ 研究の実際

Ⅰ 授業改善研究部

(1) 研究活動の目的

様々な角度からの授業改善や基礎的な学力を向上させるための手立てを全職員に提案していくことによって、研究主題にある『読解力を高める』ことや、『主体的に学びに向かう生徒の育成』を実現していく。

(2) 研究活動の概要 <研究活動を始めるにあたって～研究課題の見出し～>

① 「読解力」とは何かを定義する

研究主題や活動目的に「読解力の向上」をあげたものの、その解釈は難解で、校内研修で取り上げても、なかなか職員の意見を集約することができなかった。そこで、各教科において「読解力を要する場面は」という観点を考え、次に「それを育てていくには」という視点で互いに意見を出し合い、それを集約して各授業における課題として取り組んでいくこととした。別資料3

(各教科におけるそれぞれの読解力の解釈とその対応 (一部抜粋))

各教科において読解力が 求められる場面 及びそれを活かす指導

社会科

- 図表、グラフの意味を正確に捉えることができる
- 資料や史実を基に推測し、学習を深められる

- 資料をより具体的に読み取ることで、根拠や理由を明らかにして推察したり、表現したりできるようにする。
- 社会的背景や実生活・実社会との関連性を意識できるような資料や教材を授業に取り入れる。
- 思考ツールを活用することで、社会的な事象を多角的・多面的に捉えさせるようにする。

数学科

- 数式の意味を正確に理解し、応用できる
- 表・グラフ・図を的確に読み取り、応用的に活用することができる

- 式の表し方のきまりや計算法則を確実に理解させる。
- 問題解決の場面では、解決の見通しを持たせた上で、適切に数式を活用できるように指導する。
- 表・グラフ・図から読み取る問題に取り組む際に、条件を変えたときに成り立つ性質を見いだしたり、他に分かることに気づいたりできるような活動を促す。

②読解力の現状を“見える化”する

研究当初に各教科で読解力の定義を協議し、読解力向上への取組の方向性を定めた。その際、本校の生徒が実際にどの程度「読解力」が身に付いているのかを数値として把握することが必要であると考えた。

(i) 各種学力調査（令和4年度実施分）の結果分析から別資料4-1及び4-2

令和4年度実施の全国学力・学習状況調査及び長崎県学力調査の課題を各教科で分析し、一覧表にまとめた。その結果、読解力を特に必要とする設問に対しての正解率が著しく低いことが明らかとなった。

(ii) リーディングスキルテスト（令和4年度実施分）の結果分析から

生徒一人一人の読解力を可視化するとともに、経年比較を行うため、R4年8月は全校生徒、R5年7月は2・3年生を対象にリーディングスキルテストを実施した。R4年調査結果より、本校生徒は、多くの項目で全国平均に届かず、とりわけ「同義文判定能力」と「推論能力」の2項目が低いことが明らかとなった。

③読解力の向上に取り組む

(i) および(ii)の現状を踏まえ、課題となっている読解力を高めるための手立てを次のように考え、実践を行った。

- 授業改善→各授業において意識的に「読解力の向上」を図る活動を仕組んでいく。
- 各種活動→学校行事や生徒会活動等で生徒が自主的に考え、計画、実行していく場面を作っていく。

授業改善研究部は主に「授業改善」を中心に研究に取り組んできた。その具体の一端を以下に記す。

(3) 研究活動の具体

【授業改善に関する取組】

①授業改善のポイントの明確化と学習指導略案の作成・活用【仮説の検証方法①②③】

＜授業改善のポイントを明確化し、授業研究の更なる活性化に迫る＞

長崎県が示す「授業改善メソッド」および「読解力向上プラン」を紐解くとき、本校の授業改善における課題点が見えてきた。そこで、令和4年度は、「授業改善のポイント」を5つに設定して研究を実践し、また令和5年度はその内容を再度整理して、ポイントを3つに絞り、研究を進めてきた。

<R4 授業改善の5つのポイント>
 P1：めあて・まとめの確実な設定
 P2：課題・家庭学習とのつながり
 P3：学習形態の工夫
 P4：読解力の向上
 P5：発表・発言への支援・指導



<R5 授業改善の3つのポイント>
 P1：めあて・まとめの深化
 P2：課題・家庭学習との
 つながり
 P3：読解力の向上

ポイントを3つに絞ったのは、R4年度のP3、P5の2つのポイントにある程度
 のめどがたったことと、P1に関しては更なる深みへ、また、P2、P4に関しては各
 種調査結果で課題が浮き彫りになったためである。

<研究授業用略案を活用することで、各自の授業デザインのレベルアップに迫る>

上記の「授業改善のポイント」を研究授業（授業公開）の際の視点として明確化し、ま
 たその後の授業研究会において、異教科間でも検討議題が焦点化しやすくなるよう、本校
 独自の学習指導略案を作成し、活用してきた。

（研究授業用の学習指導略案（数学科）の例）

展 開

	指導・活動計画	形態	発表	活動	評価	授業改善・評価のポイント
1	前時までの振り返り	△		個	学向力-3	P2 性質まとめカードを復習してくる
	手に入れた性質の確認	◇		個		
2	めあて	◇	全	個	学向力-1	P1 生徒の言葉をもとに、めあてを立てる
	「手に入れた性質を根拠として、いろいろな図形の角の大きさを求めることができる。」					
3	活動内容					
	○問題①に取り組む	△		個	知技-2	P3 根拠となる性質が整理できているか
	・ペアで答えの確認、考え方の説明、発表	△	☝	ペア	思判表-2	P3 根拠を明らかにしながら説明できるか
	○問題②に取り組む	◇		個	知技-2	P3 根拠となる性質が整理できているか
	・新たな考え方があれば発表	◇	■	個	思判表-2	P3 根拠を明らかにしながら説明できるか
	○問題③に取り組む	△		個	知技-2	P3 根拠となる性質が整理できているか
	・ペアで答えの確認、考え方の説明、発表	◇	☝	ペア	思判表-2	P3 根拠を明らかにしながら説明できるか
	○練習問題・発展問題に取り組む	△		自由	知技-1	



研究授業の様子

②研究授業の実施【仮説の検証方法①③】

＜視点を明確にした研究授業を実施し、授業レベルの更なる向上に迫る＞

本校では、各教科または道徳科において、職員全員が1年間のうちに研究授業を実施する。①で説明した学習指導略案を使用し、授業改善のポイントを意識しながら授業を構築していった。

③授業研究会の実施【仮説の検証方法①③】

＜教科間の垣根を越えた授業研究会を実施し、深い学びの実践に迫る＞

授業研究会では毎回テーマを設定することで、同一教科間での研究会とは違う、活発かつ率直な意見の交換ができた。

(授業研究会の内容とテーマ一覧)

日時	研究授業	授業研究会のテーマ
R4 5月18日(水)	3年 道徳科	テーマ:「読解力」と「家庭学習」 読解力が高まった場面、高めようとした場面について効果的な家庭学習の工夫ができていたか(どのようにすべきか)
R4 7月14日(木)	2年 保健体育科	テーマ:「読解力」と「家庭学習」 読解力が高まった場面、高めようとした場面について効果的な家庭学習の工夫ができていたか(どのようにすべきか)
R4 9月29日(木)	1年 理科	テーマ:自身の授業と比較して考える 「授業改善の5つのポイント」それぞれについて
R4 10月20日(木)	1年 技術科	テーマ:自身の授業と比較して考える 「授業改善の5つのポイント」それぞれについて
R5 1月17日(火)	2年 数学科	テーマ:まとめ 『まとめが子どもに届く授業』をつかっていくための手立て
R5 7月18日(火)	1年 国語科	テーマ:振り返り 生徒の学びを深める『振り返り』と『家庭学習』

校内研修・授業研究会の様子



④宮中スタンダード（教師用・生徒用）の作成と活用【仮説の検証方法①②③④⑤⑥】

＜全教科、全職員でスタンダードを活用し、授業実践において更なる高みに迫る＞

研究授業や授業研究会を重ねていく中で、「視点や実践にまだばらつきがあるのではないか。もっと統一した指標のようなものが必要ではないか。」という声があがり、『宮中スタンダード』の作成に取り組んだ。実践項目の中に、「長崎県授業改善メソッド」を取り入れ、まず教師版を作成し、共通実践を目指した。

また、授業で協働的に考える場面を仕組むためには、落ち着き、安心して学習できる環境づくりが必要であると考え、学習規律と支持的風土の基盤の確立に向け、教師版に続き生徒版を作成した。生徒にはそれぞれの発達段階があるため、自律的に成長するための行動変容を起こすことができるようにルーブリック形式にした。R4年度に作成し、教室に掲示した。授業では、授業開始時や話し合い、発表の場面で、生徒版宮中スタンダードに触れるようにしている。生徒会活動でも、専門部の月別目標や学習や生活の実態把握のためのアンケートなど、頻繁に活用している。

宮中スタンダード～「できた」「分かった」の笑顔があふれる授業を求めて～

学習活動	学力向上のためにめざす授業	読解力育成のために
めあて・まとめ	「めあて（課題）」と「まとめ」が子供に届く授業	すべての子供にめあてを理解させ、授業のスタートラインをそろえる
自分の考えをもつ	ねらいに即した「書く活動」を重視する授業	「～だから…である」など、根拠を明確にして表現させる
協働的に考える	「学習規律の徹底」と「支持的風土の醸成」により安心して学べる授業	考えの共通点や相違点に着目しながら聞く習慣を身につけさせる

宮中スタンダード（生徒版）

レベル 内容	1	2	3	4
授業の準備	授業前に着席し、黙想をする。	机の上に必要な学習用具を準備する。	学習用具を開き、予習や復習をして待つ。 	家庭で予習や復習をする。 
聴き方	顔と体を話し手に向け、考え・意見を受け入れる。	あいづちを打ちながら、話を最後まで聴く。 	考えが似ているところや違うところに気をつけて、話を聴く。	話のポイントをおさえながら、自分の考えをまとめる。 
伝え方	自分の思いや考えを伝える。	主語や述語をはっきりと示して伝える。	「～だから…である」など、根拠を明らかにして表現する。	他者の考えを取り入れて、自分の考えを表現する。
学習マネジメント	学習時間を決める。 	学習内容を設定する。 	宿題と自主学習を分けて計画する。 	宿題と自主学習の計画を立て、実行する。 

⑤校内研修（授業研究会）における教師の振り返り【仮説の検証方法①②③④⑤⑥】 ＜スタンダードの実践から『長崎県授業改善メソッド』に迫る＞

前述したように、本校では全教員が1人1回以上の研究授業（授業公開）を行うこととしているが、その際、『長崎県授業改善メソッド』の活用を意識することを共通実践項目としてきた。スタンダードの作成、実践からその意識は明確に高まっていった。また、校内研修時や授業研究会時に職員による自己評価も実施した。

⑥ICT活用能力の強化（職員・生徒）【仮説の検証方法⑥】

＜職員、生徒双方のレベルアップから授業改善及び学力向上に迫る＞

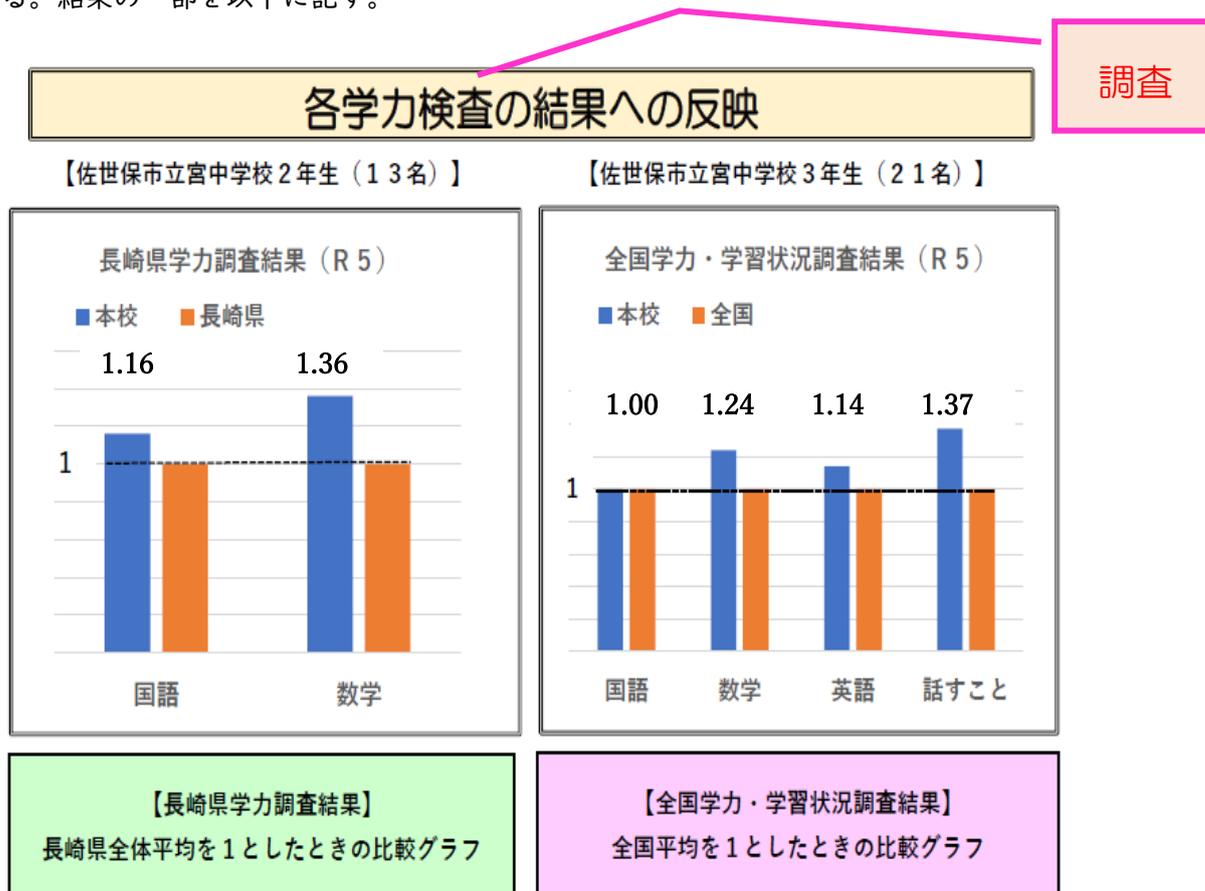
ICTの活用は、教科の授業のみならず学校活動全体において、そのレベルアップが不可欠である。しかしながら、職員の中には不得手とする職員も一定数いるため、本校では、研究指定以前より職員研修として、時間をとってICT機器の使用研修を実践してきた。全職員が授業において活用できるレベルを目指し、令和5年度は前年度より更に回数を増やして実践してきた。

また、生徒に関しても、タブレット端末導入時から持ち帰りをさせ、使用頻度を高めていきながら、活用能力を培ってきた。今ではほとんどの生徒が教科授業や諸活動において、活用できるレベルに達している。

【授業改善に関する成果】

①各種学力調査の結果の変容 別資料5

前述のように、全職員で授業改善に取り組みながら、各種の学力調査に臨んだところ、ほぼ全調査において向上するという結果を得た。もちろん、教科による授業改善のみが理由ではなく、学校活動全体において研究主題を意識しながら取り組んできた成果と考える。結果の一部を以下に記す。



②リーディングスキルテストの結果の変容

読解力の育成を中心に据えた授業改善を実践した中で、分析を行いながら、授業改善を中心に研究活動を実践してきた。その結果、複数の項目で向上がみられた。特に課題であった2項目「同義文判定能力」「推論能力」において次ページに示すような結果を得た。これは、授業改善において、全職員がポイントを明確にしながら、日頃の授業実践を行ったことに加え、次のような各活動においてもそれを十分意識した活動を仕組んでいった成果であると考えられる。

[改善のための具体的な取組例]

- 主語と述語の使い方が誤っているときや不明瞭なときには聞き直すなど、日頃からこまめな言葉のやりとりを実践した。
- 各授業ではペアやグループ活動を充実させるとともに、意見の共有場面で ICT 機器を積極的に活用するなど、自分の考えとより多くの他者の意見と照らし合わせるができるようにした。
- 「宮中スタンダード（生徒版）」を生徒会活動でも活用させるなど、生徒への浸透を図った。

(リーディングスキルテスト第1回と第2回の数値の変容 (一部抜粋))

	R4.8月	R5.7月	変容
同義文判定能力	-0.08	0.06	+0.14
推論能力	-0.19	0.26	+0.45

(中学生の平均能力値を0としたときの本校生徒の平均値)

③「長崎県授業改善メソッドについての自己評価」の変容

校内研修時や授業研究会時に「長崎県授業改善メソッド」の実践に関して、職員による自己評価を実施してきた。日頃の授業において、常に宮中スタンダードを意識しながら、各自がより効果的な授業改善につなげようという意図である。その数値の変容を以下に記す。

R4.7月の調査と比較して、R5.7月では、全関連項目で数値は向上していた。宮中スタンダードを教師だけでなく生徒とともに意識し、実践してきたことが、自己評価の変容として数値に表れている。

関 連 項 目	R4. 7月	R4. 12月	R5. 7月	R4.7月→ R5.7月の 変容
「『めあて（課題）』・『まとめ』が子供に届く授業」に関する項目の平均値	2.92	3.06	3.09	+0.17
「ねらいに即した『書く活動』を重視する授業」に関する項目の平均値	2.97	3.07	3.13	+0.16
「『学習規律の徹底』と『支持的風土の醸成』により安心して学べる授業」に関する項目の平均値	3.15	3.32	3.31	+0.16
長崎県授業改善メソッドを活用する意識	2.50	3.33	3.25	+0.75

(「長崎県授業改善メソッドについての自己評価」の変容 1～4の4段階評価)

2 家庭学習研究部

(1) 研究活動の目的

生徒が自ら家庭における学習を計画して取り組む「学びの習慣化」を目指し、そのための手立てを生徒と共に考え、実践していくことで、研究主題にある『主体的に学びに向かう生徒の育成』を実現していく。

(2) 研究活動の概要 <研究活動を始めるにあたって～研究課題の見出し～>

①家庭学習の現状を“見える化”する

(i) 全国学力・学習各学力調査（令和4年度実施分）の結果分析から

令和4年度実施の全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果を見ると、「学校の授業時間以外に普段（月～金）1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか。」という質問に対し、「2時間以上」の回答が6割を超えていた。これは全国平均を大きく上回るものであるが、昨年度の3年生は通塾及び放課後学習の時間も多く、そのことが影響していたと思われる。一方、“家庭学習の質”という点では課題があった。放課後学習は半ば強制であったし、通塾での学習の質については確認が難しい。塾の時間以外はほとんど学校から出された課題を行うための時間ではないかと推測された。

(ii) 家庭学習実態調査の結果分析から

(i)の現状を踏まえ、生徒の家庭での学習時間や内容の状況を把握するため、Googleフォームでアンケートを行った（第1回令和4年5月）。結果は次のとおりである。

平日の家庭学習平均時間 **1.64時間** 休日の家庭学習平均時間 **2.03時間**
(調査対象：全校生徒45名)

平日の家庭学習時間において、県が推奨する平日平均2時間以上、休日平均3時間以上に届いておらず、まずこの点が本校の課題であることを全職員で認識した。

②「質の高い家庭学習」とは何かを定義する

「子どもの学びの習慣化」においては、家庭学習の定着化、時間の増加のみならず、その内容の“質の向上”も重要である。前述したように、学びの質に関しては不透明な部分が多い。本来ならば学習の内容のレベルの高さ＝質の高さであると考えられるが、毎日、生徒一人ひとりの学習内容を確認する作業は、教師にとって膨大な手間となる。

そこで、本校では、学びの質の向上＝自主学習時間の増加と考えた。課題学習ではなく、自ら必要とする学びに手を伸ばすことで、学びの質は高いものにつながっていくと考えたからである。

家庭学習研究部は主に「家庭学習の量と質の向上」を中心に研究に取り組んできた。その具体の一端を以下に記す。

(3) 研究活動の具体

①学習マネジメント力育成による家庭学習の向上【仮説の検証方法②⑤】

＜自己マネジメント力の向上から主体的な学びの育成に迫る＞

本校では以前より、「フォーサイト手帳（㈱FCE エデュケーション）」を導入し（「宮」と「マネジメント」のMから、「Mノート」と呼んでいる）、使用してきたが、単なる記録帳のような役割に過ぎず、十分な機能を果たしてはいなかった。そこで、学習に計画性を持たせ、自己マネジメント力を向上させる一助として、抜本的に記載方式を変えていくこととした。変更の具体例を次に記す。

[改善のための具体的な変更例]

- 記入すべき項目の精選（必要な分だけの記入）
- 毎週末（原則として木曜日・金曜日の朝10分間）マネジメントタイムを設定し、その日までの家庭学習時間の集計と振り返りを行う。
- 計画を立てる時間や振り返る時間の設定等を工夫し、生徒一人ひとりの実態に合わせた記入ができるようにした。
- 職員で生徒の頑張りを称賛し、翌週に向けてアドバイスをを行った。
- マネジメントレベルが高い生徒は1週間分の家庭学習時間や内容の設定まで行うようにした。

マネジメントタイムの様子



②諸活動への取組による家庭学習の向上【仮説の検証方法④⑤⑥】

<主に生徒会活動から主体的で対話的な学びの育成に迫る>

前述のとおり、本校では家庭学習の質の向上を「自主的な学習量の増加」と捉えた。授業における取組は、Ⅱ－Ⅰ授業改善研究部で述べたとおりであるが、当部の研究における考え方として、授業の取組とは異なる角度で自主的な学習量の増加を図ることができないかと考え、生徒会活動に着目した。

本校の生徒会活動は元来活発ではあったが、執行部や専門部はそれぞれ独自に活動しており、統一感に欠ける面があった。そこで、様々な活動が「学力向上」や「家庭学習の充実」につながるよう仕組んでいった。具体的な活動例を以下に記す。

(i) 週課題コンテスト【仮説の検証方法④⑤⑥】

生徒の学習の習慣化と、基礎的・基本的な学力の定着を図ることを目的とした。各学年において、曜日ごとに教科を設定し、学力の定着が難しい生徒が少しだけ手を伸ばして届くくらいの難易度を設定している。この週課題は、生徒会学習部で毎日提出状況をチェックし、「週課題コンテスト」として学級ごとの提出率の公表を行い、定期的に提出状況の良い生徒を発表したり、インタビューしたりすることで、生徒自身が家庭学習への意識を高めるようにしている。



毎日の週課題提出率を本校階段に掲示している

	月	火	水	木	金
1年	理	英	国	社	数
2年	国	社	数	理	英
3年	英	国	社	数	理

各学年の週課題の教科設定

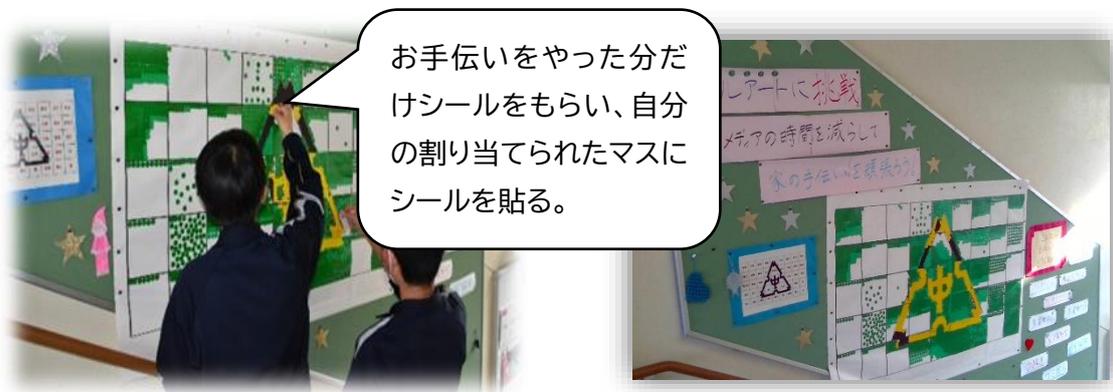
★学習部 (週課題提出率調査)										
ファイル 編集 表示 挿入 表示形式 データ ツール 拡張機能 ヘルプ 最終編集: 教科前										
100% 123% デフォルト 10 B I A										
A1	fx									
1	月	7	7	9	9	9	9	9	9	9
2	日	20	21	1	1	5	7	7	9	9
3	曜日	水	木	木	木	月	水	水	木	木
4	教科	社会	数学	数学	数学	英語	国語	社会	数学	数学
5	1	△	○	○	○	○	○	○	○	○
6	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	3	△	○	○	○	x	x	○	○	x
8	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	6	○	△	○	○	○	○	○	○	○
11	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	9	△	○	○	○	○	○	○	○	○
14	10	△	○	○	○	○	x	○	○	○
15	11	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16										
17										
18										
19	提出者数	6	8	11	11	10	9	11	11	10
20	提出率	54.5%	72.7%	100.0%	100.0%	90.9%	81.8%	100.0%	100.0%	90.9%
21										
22										

生徒会学習部が毎日入力している週課題提出の集計用スプレッドシートの一部

(ii) メディアアンケートを元にしたお手伝い奨励運動

「丸シールアート」【仮説の検証方法⑤】

定期的を実施している生活アンケートにおいて、生徒自身が「電子メディア」の使い方に課題を感じていることが分かり、また、このことが家庭学習に大きな影響を与えているのではと考え、電子メディア使用に関するアンケートを作成し、第1回を令和4年度9月に実施した。その結果をもとに生徒会役員が分析を行い、そこから、全校生徒が家庭での時間の使い方を改善させるための取組「家でのお手伝い奨励運動『丸シールアート』」を企画して、全校生徒で取り組んだ。即効的な活動ではないが、メディアの使用時間を減少させ、家庭での生活を見直し、空いた時間を家庭学習時間に充てることをねらいとした。



③ ICT活用能力の強化（生徒の活動において）【仮説の検証方法⑥】

各授業において、スライドやジャムボードを効果的に活用しており、生徒全員が毎日自宅にタブレットを持ち帰ることで家庭でも授業の内容を振り返りやすいようにしている。教科の授業においてタブレット端末を高い頻度で使用されているが、生徒会活動においても様々な場面で使用している。

[生徒会活動における使用例]

- 各種アンケートの作成とそのデータの集約
- 生徒会間での掲示板や伝言板としての利用 等

授業中にタブレット端末を活用する様子

生徒会役員がタブレット端末を活用して生徒集会を進める様子



【家庭学習に関する成果】

①「Mノート」使用による自己

マネジメント力の向上

Mノートを使って、生徒が自ら学習をマネジメントすることで、家庭学習に取り組む時間が増えてきている。特に、「課題学習」に比べると、「自主学習」の時間が増えていることから、自主的に学習する意識が高まってきているといえる。

また、学習面以外でも、日々の生活の中でMノートを活用しながら、計画・実行・振り返りを繰り返したことで、生徒が学校行事生徒会などさまざまなことに対してPDCAサイクルで取り組む習慣が身に付いてきたと感じている。

さまざまなこと

→ 具体的に見えにくい。

前に具体的なことを書く。

⇒〇〇など様々な場面においてPDCA…

(例) 〇〇の生徒会活動や、□□の学校行事など様々な場面において、

②家庭学習実態調査の結果の変容 別資料6

家庭学習の向上へ向けた取組を全職員で行う中で、その後、第2回から第4回までの家庭学習実態調査を行った。特に第3回調査(令和5年1月実施)では、第1回と比較すると、明らかな伸びが見られた。これは本校の各取組の成果ともいえるが、同時に年度始めの4~5月に比べ、この時期が部活動の時間が少なく、学校活動等が落ち着いてきたことの影響もあると考えられる。第3回調査結果の一部を以下に記す。

平日の家庭学習平均時間 **2.02時間** 休日 **2.53時間**
(第1回との調査比較 +0.38) (第1回との調査比較 +0.50)
(調査年月日及び対象： 令和5年1月 全校生徒45名)

また、自主学習(自分で計画を立て自主的に行う学習)の時間のみを比較しても、

(平日) 第1回 0.70時間 → 第3回 0.90時間 (+0.20)
(休日) 第1回 0.77時間 → 第3回 1.22時間 (+0.45)

というように、明らかな伸びが見られた。本校が目指す「家庭学習の質の向上」に一步近づけたのではないかと考える。

③メディアアンケートの結果の変容

全国的な現状と同様、本校も学習以外でのメディア使用の頻度が高い。また、それが家庭学習時間確保のブレーキとなっていることも間違いない。そこで、前述したように「丸シールアート」という活動を生徒会が発案し、実践した。その後、再度メディアアンケートを実施した結果、一定程度、メディアの使用時間の減少につながり、同時に家庭時間の増加につながっている。即効的に大きな結果が出る取組ではないが、最も大きな成果は、この取組を生徒会が自分たちで考え実践できたことにあると考える。

(メディア使用時間の変容 令和4年9月との比較)

	減っていない	あまり減っていない	少し減っている	減っている
1年生	30.8%	30.8%	23.1%	15.4%
2年生	4.8%	28.6%	42.9%	23.8%
3年生	9.1%	9.1%	54.5%	27.3%

(令和4年12月のアンケート結果より)

④ ICT活用能力の向上

ICTの活用に関しては授業改善研究部でも言及しているが、家庭学習の向上へ向けた取組においても、職員・生徒双方にとってICTの活用は不可欠であり、その活用頻度が上がることで、その活用能力に顕著な向上がみられた。以下にその一端を記す。

[具体的な活用例]

- 普段から職員室内で活用方法に関する情報交換が行われるようになった。
- 長期休業中の課題をAIドリル(eライブラリ)で設定し、生徒が自主学習として苦手の教科の学習をeライブラリドリルで行ったり、全国の公立高校入試の過去問データを活用したりして、学習時間の増加と質の向上につなげることができている。
- 夏休みのリモート登校日や感染症関連による自宅待機生徒へのリモート授業で活用している。

6月19日(月)

1.小学生の平均の求め方も計算しやすい良かったです。

2.平均を求めて、小学校よりも、はるかに解きやすくなったのでこれを利用して、求めようと思いました。

3.小学校の時よりも平均を出すのが簡単になって正負の値ってこんなところにも使えるんだと驚いた。途中計算ミスが友人と見せあいをして気づいたので勉強はいいなと思った。

4.工夫して平均を求める方法がわかったので文章をきちんとよんで解きたいです。

5.平均の求め方をしっかり復習してテストに備えたいです。

6.工夫するのが難しかったです

7.小学校よりも簡単に平均が求められるようになった。基準をしっかりと決めたいと思った。

8.

9.平均を求める際の簡単なやり方が分かって、今までより早く計算できるようになりました。

10.

11.今日は平均を工夫して求めることが出来て、小学校の時よりも簡単に計算することができました。文章の問題だと間違えが多かったので問題をよく読んで考えようと思いました。

12.今日は、平均を工夫して求めました。最初はしっかり解けていたけど、問題や基準が変わることで間違えがあったので復習をしっかりと、テストに備えたいです。

13.今日簡単に平均を計算する方法を勉強しました。基準を決めてからそれからの差を求めそれを全部足して割ればいいんだと分かりました。それを生かしていきたいです。

14.平均の求め方を工夫してするというものが達成できたのでテストに向けてしっかり対策したいです。

15.平均を求めるのに、小学生の時より簡単にやってちょっとの工夫でこんなに簡単なんだとすごい感動しました。あのめんどくさい平均の求め方は、おさらばです!

16.工夫して平均を求めることができましたのでテスト対策もやりたいです

17.工夫して平均を求めるには、基準からの差をすべてかけて、割ることであることが分かりました。

18.
欠席

19.今日は平均の簡単な求め方を習いました。最初の練習問題はできたけど少し文章が変わると間違えてしまったのでたくさん練習をしたいと思います。

生徒が家庭学習で入力した授業の振り返り

Ⅲ 成果と課題

Ⅰ 成果

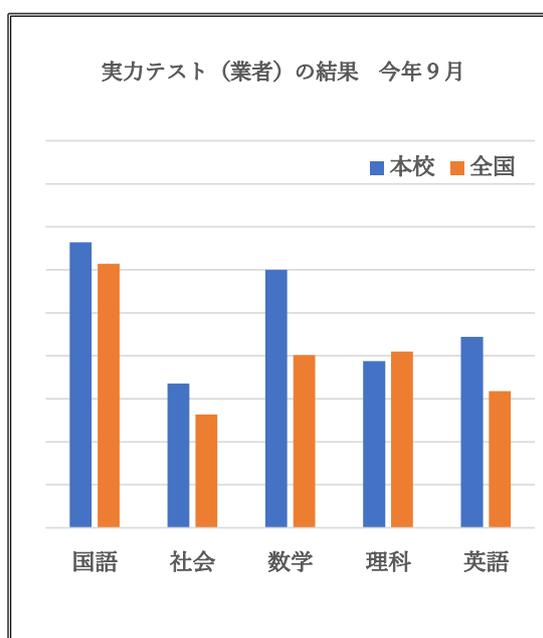
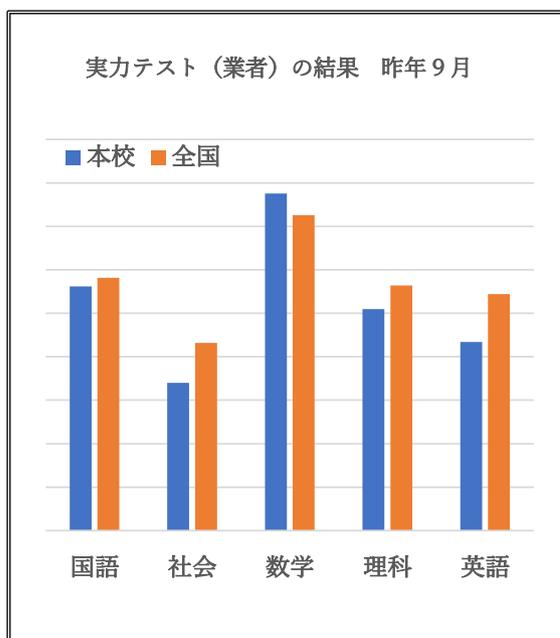
(1) 各種学力調査・テストなど数値としての成果

各種学力調査に関しては、前述したように、一定の成果をあげているが、その他にも、本校は昨年度より、実力テストとして、教材会社から購入したテストを実施している。昨年は、全国平均にほとんどの教科が及ばなかったが、今年度は全国平均を上回る教科がほとんどであった。(下図参照)

また、「英語検定」「数学検定」「漢字検定」にも多数合格しているが、特筆すべきは昨年度より受験者数が明らかに増加していることである。特に、英語検定においては学校優良賞を受賞した。

(同集団 (現2年生) による経年比較)

実力テストの結果		国語	社会	数学	理科	英語
R4	本校	58.1	47	68.8	55.5	51.7
9月	全国	59.1	51.6	66.3	58.2	57.2
R5	本校	63.2	46.8	60	49.4	52.2
9月	全国	60.7	43.2	50.1	50.5	45.9



【令和4年度1年生】

【令和5年度2年生】

(2) 生徒の自治的活動の充実

活動全体を見直し、生徒一人ひとりが生徒会活動へ参加している意識を持つことができるよう工夫した。また、生徒会活動のみならず各学校行事においても、担当者が計画立案の段階で、可能な限り生徒の“自主的活動”の場面を仕組むようにした。行事の後には、生徒自身による振り返り（反省）を行い、次の活動へのレディネスとすることで、完成度の高い活動を実現させる力を育成してきた。その結果、一人ひとりに企画力、発言力、牽引力などの力が育ってきたことを、日々の学校生活、学校行事の生徒の姿に実感する。この取組と授業改善との往還が総体としての本校の学力向上につながったと確信している。

(3) ICTの活用（質問紙調査から）

ICTの活用に関しては、各研究部の欄でも言及しているが、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の回答のうち、成果が見られたものをあげておきたい。

【質問項目】 2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか
令和4年度 「ほぼ毎日」21.4% ⇒ 令和5年度 「ほぼ毎日」76.2%

令和3年度にはすでにタブレット端末が導入され、授業で毎日使用できる状況であったが、使用頻度は結果のとおりである。令和4年度には飛躍的に使用頻度が伸びており、この点も、学力向上の理由の一端であると考えている。

2 課題

(1) 家庭学習時間について

家庭学習時間の伸びについては、PI5②家庭学習実態調査の結果の変容において言及したが、第4回調査（令和5年4月）の結果に関しては、第3回調査より減少した。これは、4月は家庭学習時間を確保することが難しいためと考える。そこで、昨年度の4月との比較を行うと、次のような結果となった。

（第1回調査（令和4年4月）と第4回調査（令和5年4月）との比較）

R3 入学生 (現3年生)	平日		休日		総平均時間 (1日)
	課題	自主	課題	自主	
R4 4月	1.00	0.65	1.28	0.65	1.73
R5 4月	1.07	0.70	1.07	0.79	1.80

R4入学生 (現2年生)	平日		休日		総平均時間 (1日)
	課題	自主	課題	自主	
R4 4月	0.58	0.58	0.65	0.50	1.16
R5 4月	0.75	0.67	0.91	0.67	1.47

(単位：時間)

増加傾向にはあるものの、増加時間は少ない。令和4年度の調査において10月、1月と順調に家庭学習時間が伸びていったことを考えれば、家庭学習に関して、時期的な面の配慮も必要ではないかと感じる。県が推奨する平日2時間以上、休日3時間以上の目標をクリアするには、時期に応じた対応についても検討する必要がある。

(2) 主体的に学びに向かう力の向上

本校では家庭学習の「質の向上」を『生徒が自主的に学ぶ時間・機会の増加』と解釈している。家庭学習実態調査を経年比較したところ、現2・3年生のうち約49%の生徒の自主学習時間が増加していた。しかし、自主学習の時間自体はまだまだ少なく、休日平均3時間には届いていない。M ノートを活用したマネジメントの習慣は身に付きつつあるが、個人差がみられる。全ての生徒が自分に必要な学習を見据え、先を見通して計画を立てることができるように導く必要がある。

(3) 教科横断的な深い学びへの取組

研究がスタートした当初は研究課題の一つとしていた「教科横断的な深い学び」の部分はほぼ手つかずの状態が終わってしまった。しかし、この研究を通して授業改善の下地が十分できたので、更に改善を進め、生徒が自ら課題等を選択する場面を増やし、学習の個別最適化も図っていききたい。また、カリキュラムマネジメントを進め、生徒が様々な教科で学びのつながりを実感できるようにしていきたい。

※追記

本校の研究実践の流れ（全職員での確認用に使用）を資料集の7～9に付加する。

おわりに

本日は、ご多用な中、本校の研究発表会へお越しいただき、誠にありがとうございました。
本校では令和4年度より、長崎県「学びの活性化」プロジェクト実践モデル校事業、佐世保市教育委員会指定「授業改善」を受け、『読解力を高め、主体的に学びに向かう生徒の育成』を研究主題として研究を進めてまいりました。

宮中学校は、周りにみかん畑や田園風景がひろがる、全校生徒50名あまりの長閑な学校です。小規模校は、一人ひとりの意見が反映され、一人ひとりが活躍の機会が与えられることがメリットといわれますが、それは、子どもたちがさまざまな活動を「自分たち」で計画し、「自分たち」で運営、実行するということでもあります。そのため、すべての生徒がいくつもの役割を、経験や能力に関係なく取り組むことが当然のこととして捉え、リーダーを中心に、足りないことは互いに支え合い、補い合い、協働してやり遂げる風土が伝統的に醸成されています。その背景には、宮地区の古くからの歴史や伝統に対する誇りや、地域の教育力や家庭の教育力があることはいままでもありません。

本研究では、このような風土を背景に、様々な活動を通して身に付けた「自分たちで考えて行動する力」をいかにして、「学び」に繋げていくかを考え、取り組んできました。研究を通した子どもたちの変容はもちろんですが、全職員がそれぞれの教科で読解力を身に付けるために自らの授業を再検証し、あたりまえのように課していた宿題と家庭学習のあり方を捉え直し、ICT機器の活用方法を年齢や経験を越えて教え合う姿にこそ、この2年間の研究の成果があらわれていると考えています。

近年の急速な社会の変化は、地域や学校の形そのものを大きく変えつつあります。学制150年を経た今、改めて学ぶことの意味や大切さを問い直す時期が来ています。学制公布の年に著された福沢諭吉の『学問のすゝめ』には、人は生まれながら平等につくられているのに、社会的地位や貧富、能力に差が生じる要因は、ただその人が「学ぶ」か「学ばない」か、という学問に対する取組の差であるという主旨が書かれています。本校校訓「自ら学び、互いにみがこう」は、まさに学びの原点そのものをあらわしているものだと確信しています。

最後に、本校の研究を進めるにあたり、熱心なご指導と丁寧なご助言をいただいた長崎県教育委員会、佐世保市教育委員会をはじめとする関係機関の皆様方、視察を快く受けていただいた先進校の皆様方にこの場をお借りして深くお礼を申し上げます。今後とも、本校の取組が、多くの皆様の参考にしていただけるものとなるよう、引き続きご指導をお願い申し上げます。

令和5年11月24日

佐世保市立宮中学校 教頭 中村 敦朗

【研究同人】

(令和4年度) 校長 熊本 直樹
教頭 中村 敦朗
教諭 根津 園子 紙谷 博美 浦本 陽華 中添 陽介 大川 真理
増尾 薫人 湯村 舞 松尾 真二
養護教諭 和田 節子 事務職員 嶋本 和 学校管理員 蜂須賀 浩啓
スクールサポートスタッフ 岩永 こずえ 学校司書 川内 則子
心の教室相談員 宗像 照子
非常勤講師 内間 安彦 高田 未央
ICT支援員 南 克彦

(令和5年度) 校長 熊本 直樹
教頭 中村 敦朗
教諭 紙谷 博美 本多 いずみ 浦本 陽華 中添 陽介 増尾 薫人
湯村 舞 小堀 将輝 根津 園子
養護教諭 小池 サオリ 事務職員 嶋本 和 学校管理員 蜂須賀 浩啓
スクールサポートスタッフ 岩永 こずえ 学校司書 市瀬 めぐみ
心の教室相談員 宗像 照子 スクールカウンセラー 近藤 由香里
非常勤講師 中倉 奈津美 井福 和利 高田 未央
ICT支援員 鹿谷 芳則